

布施雅男

蘭花物語

頼山陽と妻梨影



鳥影社

布施雅男（ふせまさお）

1927年生。旧制高知高校文甲ヲ経テ阪大文学卒。

戦後、新興芸術文学会委員、「群星」「彩光」「中央文学」同人。

現、「骨壺」「滋賀作家」同人。

『花骨壺・落城靈秘』・『歴史小説への招待七話』（全国学校図書館協議会選定図書）

川西市大和東1—92—8 〒666—01

蘭花物語 頼山陽と妻梨影

定価1200円

著者 布施雅男

発行 昭和61年10月1日

発行者 百瀬精一

発行所 鳥影社

〒143 東京都大田区大森中3—11—12

電話 03(763)3570

〒392 長野県諏訪市大手2—2—16(編集室)

電話 0266(53)2903 Fax(58)6771

印刷製本 精文堂書籍(株)・書籍用中性紙使用

発売元 星雲社

〒112 文京区小石川5—19—25

電話 03(947)1021

©Masao Fuse 1986 Printed in Japan

乱丁・落丁はおとりかえします ISBN4—7952—5125—8 C0093 ¥1200E

目次

その一	女の里	5
その二	男の里	26
その三	めぐりあい	47
その四	女ごころ	69
その五	男ごころ	91
その六	京のひと日	114
その七	水 仙	137
その八	時の流れ	161

蘭花物語

頼山陽と妻梨影

その一 女の里

「女というものはな、優^{やさ}しさがいのちや。やさしさを失うたら女ではない。道ばたの石ころとおんなじや、血も情も通うとらんのや」

母の口癖を耳にするたびに梨枝^{りえ}はいつものことながら思わず苦笑してしまふ。

へあまた始^はつた、今日はなんの話をするつもりかしら……」

お曲^{くど}突^とさん（かまど）に薪^{まき}をくべながら、庭の落ち葉を熊手^{くまて}でかきあつめながら、大きなたばこの葉を揃^{そろ}えながら、なにをしようといふと気紛^{きふ}れで母は口癖^{くへい}となつた決まり文句^{ぶんぐ}を呟^{つぶや}いている。せわしげに働くうつぶせ加減^{かへん}の母の背越しにひとり舞台^{ぶたい}の語り節^{がし}が揺らいでいる。

思うてみれば随分とながい間、母の語り節を聞かされている。幼いころは子守唄、漸くちかごろになつてみて母の語り節が理解できるようになつてきた。人は誰でも昔話^{あま}は好きである。講釈^{こうしゃく}が聞きたければ木戸^{きど}銭^{せん}を払^はえばいい。ところが母の語りは木戸^{きど}銭^{せん}不要^{ふぎょう}の天^{あま}の邪鬼^{じやく}、気分^{きふん}しだいのひとりごとである。興に乗^のつたところで容赦^{ようしや}もなく話は跡切^{あと}れて無言劇^{むげんげき}である。ああ、もどかしいと梨枝はいつも思う。そんなことは意にも介^かしないで母の次の語りは別^{べつ}のはなしである。

へあまた……」その癖、梨枝の心は妙に和^なむのである。

ちかごろは、どうも話が難^づしくなつてきたように思う。それというのも土地にまつわる歴史というものを語りはじめたからで、複雑な人間の繋^{つな}がりに梨枝の頭のなかは困惑^{くわん}してしまふ。それでも

朦げに浮かびあがる歴史のたたずまいに心は惹きつけられてゆく。いままで気もつかなかった歴史の登音が不思議なことに身近かに聞えてくるように思える。それにしても全く思いもつかぬ別の世界があったものと感心するのである。四季の移ろいの静謐な里であってみれば歴史とはなんと痛々しいものなのであろうかと梨枝のこころは疼く。なんのことはなく今日ひと日も暮れた、そんな日々の営みのなかで母の語りは梨枝の目を醒ましてくれる。それにしても母はいったいどうして斯うした話を知っているのだろうかと思議でさえある。

朝な夕な綿向山を見あげるにつけても幼いころの母の語りがふくよかに甦ってくるのである。小手毬ついたり、おこんめしたりしながら、いつも山の由来を思いかべていたものであった。

「ずいぶん昔のこと、夏やいうに山が真白に雪で埋れてしもうたとやら、村の衆が山へ登ってゆくと猪の足あと、それをどんどこと踏んでゆくと一挙に山のとっぺんに着いた由、と思うや、尊い神さまの後光がサッーと射し、五色の雲の上には神さまの御姿、その前に猪。——天子さま、そう欽明天子さまに此の事を申し上げなされたところ、勅使が見えてな、綿を積み重ねて見ているようにやと仰言った故、綿向山と名付けられた、そして山のとっぺんに天照大神さまのお子さまを、ちやんとお祀りなされた、よう覚えておくんやで——」

遙かに遠い日々への回想は涙ぐむようなころの憩いでもある。走馬燈はゆくりかにめぐる、その明滅は梨枝にとつてのささやかな歴史のあゆみである。生きている、生かされている、そんな実感を肺腑にしみて覚えるのである。言葉とはならない喜びをじつくりと噛みしめる。ゆたかではなくとも生きている幸せを覚える梨枝である。

家の前の聖財寺境内にある百日紅にうす紫に花が咲いた。すべすべと滑る木の幹に幾たび攀じのぼったことであらう。なにもなにもが梨枝のこころに縋んでいる。この寺を草創した僧善慶は室町

幕府に仕えていた武士であつたが、二君にまみえずで主君の死を契機として仏に仕えたという。

「前のお寺にはな、ありがたい阿弥陀如来さまの画像があるのやで。むかし石山本願寺に馳せ参じなされたことがあつてな、その御褒美に貰われたものや、頭如けんにょという偉い上人さまからな」

母から斯の話を聞かされたとき、お坊さまが戦いくささをされるということが腑ふに落ちなかつたことを思いだすのである。さきごろ寺を継いだ曇鳳どんほうのところには常時学僧たちの姿が見え講筵こうえんが敷かれている。香華こうけのくゆりのなかで読経どきやうの音が静もつて揺らいでいる。寺とは然うしたものだと思つてゐるだけに、いまの梨枝は殊更に歴史というものの流れを感じるのである。いまの世が、この里が長閑のどかであればあるほど歳月の重い登音あしおとを耳にしてみよう。ときには怖ろしく、ある折は哀しげに心の底に斬り苛さいなんでくるのである。いつまでも静かであつてほしい、この今は永劫えいごうのいまであつてほしいと梨枝は思う。娘ごころの感傷などではなく母語りに擱おんだ人の世の実感なのである。

「おぬいさんは、なんでもよう知つていはる、お寺へもしょっちゅう顔出してはるさかいな」

これが梨枝の母ぬいへの里の人の評である。実によくこまめに働く母は暇をみては境内の清掃もし、幾多出入りする学僧たちの身世話などもしていたようである。

まづかには仁正寺陣屋がある。元和六年、越後三條城から市橋長政が家臣四百四人を引きつれ此の地に陣屋を構えたのである。元来、武家社会は冷酷な掟おきてに縛られたものである。三條城主市橋長勝には嫡子ちやくしがいなかつた。かくて所領没収、家名断絶と悲運に泣くところであつたが、その甥である長政に家督が許され近江・河内に二万石を与えられたのである。四万石から二万石へと減封である。当然のこと主従の別涙べつるいを流さねばならない。三條城をあとに浪浪の境へとさまよひの旅にでる家臣たちの後姿を見送つて長政は此の地へ来た。重く淋しらのところで長政は仁正寺藩主となつたのである。この心の翳かげりが目には見えずに尾をひくとは思ひもしなかつたにちがいない。一族であ

れ権力の座を狙う虎視^{こし}の牙は機を待ち構え、その渦中にあるかぎり身の安泰は望むべくもない。いずこの大藩小藩それぞれに哀史を刻みこんでいる。

本丸、東西五十一間、南北五十間である。城下は三筋となつて夫々の筋は重臣、中級武士、足輕の自宅を構えている。蒲生氏郷が会津の地へと移封となつて荒涼となりはてた里にも、いまは活気が溢れている。三十七年という歳月の流れが、いまや昔日の賑わいを甦らせたのであった。

「これは内緒のことや、滅多なこと人に話してはいかんのやで。仁正寺藩二代目の殿さまには男の御子が六人、女の御子が二人おいでやったのや。御嫡子^{ごちやくし}政房さまは大層かしこいお方で、それというのも母さまは徳川さまに仕えなされた板倉さまとやらしい偉いお方の御息女。ところがな、惜しいお方は早う此の世から消えなさる、母さまは二十二才でお亡くなりじゃった。殿さまは溝口出雲守さまの御息女をお迎えなされた。御子がお産れになる。政勝さまや。なんとしても政勝さまをお世継ぎ^{よつぎ}にしたい、そのためには政房さまが邪魔になる。藩のお侍衆は二つに割れてな、争いごとが絶えなんだそうや。あわよくば若君政房さまの命をと狙う人たちがいる、お偉いところは気の休まるものではないのや。まわりは悉く敵と思わんといかん、いつなんどき命を奪われるかもわからん、権勢の座とはそうしたもののなんやで。それにくらべると、この暮らしはなんと安らかじゃろう

――

「女というものはな、いったんお仕えたからには心からお仕えせねばならんのやで。おまえかて、いずれは嫁にゆくことになろう、御奉公にあがるかも知れん。命がけでお仕えすることや、よいな。――そうやったな、このまえの話のつづきをせないかんわ。万津さまのことや、この方は若君政房さまの乳母でな、若君の母さまがお亡くなりなされる折、この乳母をお呼びになつて、政房を守つてやつてくれと頼まれたのじゃ。お殿さまの奥方さまの御言葉を乳母の万津さまは大切に胸

の底ふかく仕舞われた、それはもう傍で見ではおれぬほどに心労されたのじゃわ。政房さは立派な御氣性だけに容赦なく思うたことを仰言る、世の中なり藩のことなり目がようおみえになるゆえ、錐で突いたようなことを仰言る。万津さまは心配なされた、反対派の思う壺にはまりはせぬかと。お食膳にしながら万津さまは毎度お毒見をなされたそうや。政房さまのため身も心も捧げつくしての御奉公なされたのやで。寛文六年というから今から百四十年ほど昔のことやな、万津さまが殿さまのお言いつけでお出掛けになられた、その隙を狙って毒饅頭を政房さまに——たぶらかされたお女中が政房さまにな。お痛わしいことやないか、苦しまれたのも束の間で死んでしまわれたのや。妾がいなかったばかりに、ああ……万津さまは若君の命なきいま生きてはおれぬ、奥方さまに申しひらきが立たぬと池に身を投じなされたのや。政房さまのあとを追われた、それがまことの女というもの。美しい、やすらかな死顔やったそうやで。女は美しう死んでいかんといかん、醜う息を引きとったらいかんのや。心さえ素直であれば美しう死ねる、よう覚えておくのや」

「人の世には見えぬ力が働いているのやな、あのことがあって以来、藩主さまをめぐって色々なことが起ったんや。三代目の殿さまになられる筈の、いんや、政房さまを斃された政勝さまは御乱心なさってじゃった、七人目の御子吉之助さまは僅か四才で死んでしまわれる、殿さまになられる筈のお方が座敷牢で死を迎えられる、他の方も早死なさる、なんという酷いことやろう。それだけではなかったのや、後継ぎは分家から迎えねばならん、御養子が利政さま。このお方も御乱心気味で、江戸城中では御失態なさるはで仁正寺で閉居させられなさる。そこでまた分家から御養子をお——お侍衆も感づかれたとやら、怨みじや、祟りじや、奥方さまの、万津さまの、とな。いんや、それは違うとる、怨恨などでは無うて、もっと大きな力のせいや、人の世を動かす目に見えぬ糸のせいやで。お寺でよう聞かされる因果というものやないやるか」

「さきに話した利政さまも結局は毒殺されておしまいじゃった、毒を盛ったのは藩医の森島三折というお方とやら。いや、毒を盛らさせられなさったのや。嘸や、つらいお氣持じゃったろう、こともあるうに医者の方で人のいのちを奪わねばならん、藩のお偉い衆の言いつけには逆らえんしな。三折さまはな、毎日、河原へ行つては石を拾うてきて石ひとつひとつにお経を書き写されたのや、なん年も何年も続けられ、石は幾つもの俵に一杯になったということやで。こころとは然うしたものなのやな……。納得できんことがある、毒殺されなされた利政さまは菩提寺にな、清源寺のことやが、そこには葬られなさらんだということがな。なんで御先祖のお墓と一緒にいかんのやろ、さっぱりわからんな——」

「ああ喋りすぎたわ、仕事せんといかん、仕事や仕事——」

母は黙つて畑の土を鋤で掘る。梨枝はそのあとを鋤で均しにかかる。かすかに滲む汗はこころよいのに今の梨枝はなぜか重い氣分に沈んでいる。政房の乳母であつたという万津のことが頭から離れはしない。

へ美しい死に顔とはどんなものなのかしら……。梨枝はただそれのみを考えつづけていた。

「手を休めたらあかん、早う均して種子を播かんといかんのや」
ハッと氣付いて梨枝は鋤をふるう。

「今日のおまえ、どうかしとるな。しつかりせにやいかんで」

「……………」

「なにか氣になることでもあるのかいな……。さっきの話、つづきがあるのや、ちゃんとなつたんやで。毒殺されなされた政房さまは神さまになられた。万津さまは政房さまのお墓の傍にちゃんと祀られなされたんや」

へああよかった——」梨枝はここから思った。

「妙な子や、おまえは——」母は梨枝の顔をみつめながら言う。

祟りとか怨みとか、そうした万津さまであってはいくはなかった。その万津さまは若君の傍で安らかに眠っておられる、ただそれだけで梨枝の気持ちは安らいできた。

溝口信濃守重雄の子兵部は養子となり信直のあとを嗣いで藩主となっている。市橋直方である。きわめて信仰あつき藩主であって、各地の寺を再興させている。この直方が遠祖である清和天皇の皇孫源経基を祀るべく神社をあらたに建て、政房を涼橋大明神として祀ったのであった。万津には誠忠院なる院号を諡した。とはいえ藩の、それも後嗣にからむ事件であったが故に、直方は事を秘し政房の名を伏せ、藩士以外の参詣を禁じたのであった。徳川家を慮らねばならぬ小藩主の苦衷であった。固く口を閉された秘事も、いつともなく人の耳に漏れ、口外してはならぬと言ひ聞かせては語り草となったのである。それあらぬか知る人は神社の前をよぎる折、直方のあたたかき心に感じたのである。

梨枝は母から随分と多くの昔日譚を聞かされた。ちかごろは耳にするもの悉くが心に疼きを覚えさせてくるのである。以前であれば特別の感懐も湧きはしなかった事柄が不思議と妙に心に突き刺さってくる。それだけ自分が成長したことになるのか、それとも世の中の動きとは娘ごろをも苦しめるほど苛酷なものであるのか、思わず梨枝はフウと大きく吐息をつく。吐く息は哀しいものであった。それは束の間に消えて再び梨枝は家事に手を染めるのであった。

不意に梨枝は吹き出した。たばこ屋という家業が可笑しくてたまらなくなったのである。考え出すとまた吹きだしてしまふ。

へなぞ、たばこを商うようになったのかしら……可笑しくてたまらぬのは年のせいでもないので

ある。たばこそのものが可笑しいのである。

へ長命草だと言つて有り難がる人もいる、万病の薬として吸う人もいる。かと思ふと毒があるとて怖れる人がいる、吸うているとコロリと頓死すると言ふ人もいる。そのような得体の知れぬ烟草を商うなんて……

へ笑うてばかりはおられん、人の身とて善もあれば悪もある、人さまざまやないか。それに、この商いがうちの家の生業——

もともと烟草を栽培しはじめた歴史は古い。いまから二百年ほど前である。慶長年間というから文化の今からすれば可成りの昔である。大豆、粟、稗、芋というものが主産物でしかない土地柄では烟草がきわめて恰好の稼ぎ種である。水利が無くても収穫がある。これ天の恵みとばかりに食いついたのであらう。周辺の地では烟草の繁みが目にはつく。梨枝は聞いたことがある、たばこを吸う奴は家財産取り上げじやと幕府が御触れを出したことがあったのや、と。確かにその通りで慶長年間でも三度の禁止令が出ている。元和年間にも禁止令が出された。人間とは妙なもので法網をくぐつて取り引きする、そこに無類の心地よさを満喫する代物であった。となると正しく鰥ごっこである。栽培まかりならぬ、たばこ吸うべからず、お触れ書きは素通りで元の黙阿彌である。烟草とは人を謀るたばかり草じや、異国の草に謀られて国を傾けてはならぬと憤る者も居る。このままにでは烟草は日蔭草である。そこはそれ人間の知恵である、庄屋の肺煎りで何卒お見逃しを願ひ出て落着という仕儀となる。藩主とて片意地ばかりでは下を治めること叶いはしない。烟草の栽培地に制限をつけた。という次第で、たばこ問屋の手に依つて広く各地にたばこ嗜む連中の数は増したのである。みめ美しき遊女よりも、このたばこの方が迷いやすいと物語に記されている。とにかくにも烟草は普及したのであった。たばこひとつにしてからが明と暗との歴史を繰りひろげてき

たのである。ましてや人の世の歴史は言わずもがな、理の当然なのである。

へこのたばこが、男と女を結びつける相思草とは……吸う人、吸わぬ人、それぞれに勝手なことばかり言っただけ……

へわざわざ高価な道具を使うて——保知煙管も注文が多くて忙しいということ。このきせるが保知張太閤作り……保知にある煙管屋で受け取ってきた煙管一本を掌にして梨枝は凝と見とれてゐる。粹狂な人もゐるものだと感心もするのである。きせるを賞でというよりも贅を競う風潮が出てきているのであった。

ことしも石南花のうす紅が色どりはじめるようになった。綿向神社の祭礼を迎えると各所随所で婚礼が行われる。

「えらいことや、うちの子が捕えられてしまうたんや」

「おまえのともか、うちも同じや。年寄に頼んでなんとかして貰わんとな」

「おぬいさん、力貸してほしいのや、お寺のお住持さんに頼んでみてや」

「またかいな、仕様ないな」苦笑しながら梨枝の方を振り返り母はまた笑う。

「すまんな、頼んだで」

村人の立ち去ったあと、母は目の前の寺に駆け込んでゆく。

へいつも斯うなんや……喜んでいいのやら悲しんでいいのやら我ながら妙な気持になる。在所の子供たちにとっては婚礼は一つの楽しみである。梨枝自身、そうであった。見知らぬ人が嫁いでくる、見知った人が嫁いでゆく。子供ごろにも好奇の目が動く。そのうえ、この日はいろいろな振舞にあやかれる、減多に口にしなない餅菓子も貰える。婚礼のある家の前で子供たちは屯して待つのであった。それに並行して一つの習慣があったのである。石投げである。婚礼の行列が近づくと皆

が石を投げる。調子づき興に入るや家障子に石を叩きつけるという始末、婚家は迷惑千萬である。子供たちに交つて若い衆が投石するとなると被害はただごとでは納りはしない。平素の鬱憤いまだとばかりに石に叩きつけての狼籍である。

婚礼の砌、石を打ち狼籍いたし候う者、頭取は百日手錠、同類五十日手錠。

これは藩よりのお達しである。

へなにごととも無う静かな毎日に飽きたりずに、みんな騒ぐのかもしれないア……

綿向神社の祭礼として例外ではなかった。御旅所での喧嘩である。それも常日頃の張り合い意識が年に一度御旅所で炸裂する。村の面目と意地とを懸けて争うのである。肝心の神事は放擲されたままで睨み合う。挙句は庄屋、年寄の仲裁に持ちこまれる。藩の寺社奉行も手をやく始末であつた。謂わば喧嘩もまた年中行事化していたのである。

梨枝にも見倣うて石を投げた思ひ出がある、楽しみに待ちわびた祭礼が中絶された折の悲しいおもいもある。祭礼のころになると梨枝のところに深く刻みこまれた母の話が甦ってくるのである。「人というものはな、嘘ついてはいかん、たばかつてはいかんのや。よいな——」きまり文句を耳にしていたころの母の背の温もりが伝ってくる。いまの梨枝は母の語りを自分の口で語ってみるのである。

「山というものは大事なもののや、粗略に扱えんもんや。山には柴山、草山があつてな、勝手に入れんもんや。やぶ視山、あの鎌掛城山のあたりまでとな、綿向山をめぐって昔から採め事が絶えん。山があつて皆の暮しが成りたっている、柴草が刈れんようになってみい、たいへんなことや。東九ヶ村と西の九ヶ村とが採めに採めてしもうてな、綿向神社で決着をつけることとなつたんやで。神さまに裁いていただくというわけや、東の村からは音羽村の庄屋喜助というお人が、西の